

シャルロッテ・ケルナー：『ブループリント』

以前、双子・多胎児とも関わる生命倫理にまつわる話題が二つ新聞などを通じて報じられ、随分注目を集めたので、ご存じの方もいらっしゃるのではと思います。一つは、不妊治療の際に夫婦間以外の第三者の卵子ないしは精子を使用した場合、法的には親子関係がどうなるか法務大臣が民法の整備を諮問したという話です。もう一つは、アメリカとイタリアの研究者が不妊治療の枠組みで人間のクローンを試してみるという話です。特に後者は、たとえば日本やドイツでは人間のクローニングは禁止されているので国内では実現しない話ですが、たとえ不妊治療の名目ではあっても、人間のクローンを作ることが許されるのか、あるいは自分と同じ遺伝子を持った存在を子どもとすることがどうなのか議論を呼びましたし、現在も議論が続いています。

さて、今日紹介する作品は、まさにこの問題を真っ正面から、つまり興味本位でもなく、またグロテスクにでもなく（グロテスクな扱いでしたら、医療ミステリというべきアイラ・レヴィンの『ブラジルから来た少年』や遺伝子ホラーに属する吉村達也の『ふたご』があります）取り扱ったものです。それは、ドイツのジャーナリスト出身の作家であるシャルロッテ・ケルナーが書いた『ブループリント』です。

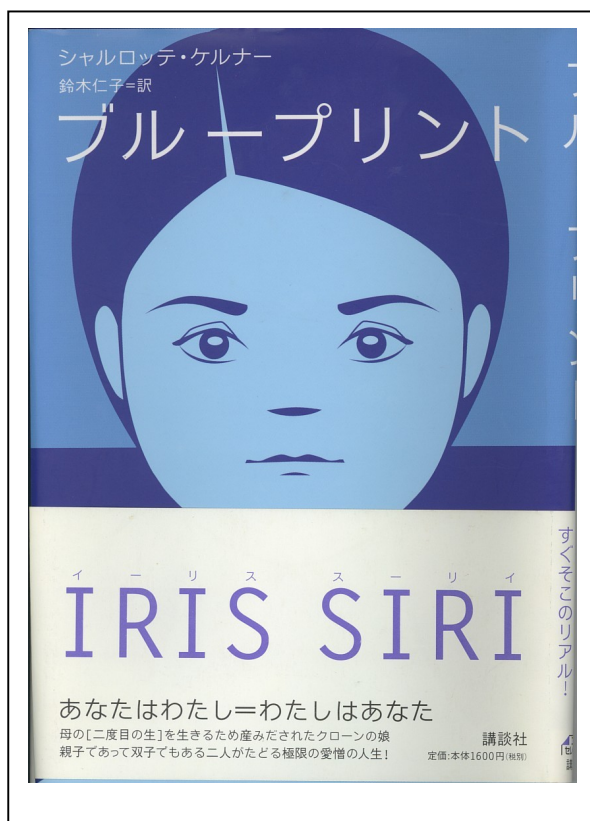
物語の内容ですが、音楽家のイーリス（虹彩の意味です。瞳は、漢字が示しているように、人を見つめるとその相手の人が小さく映って、言ってみれば子どものように自分の目の中に入るので、目へんにわらべと書くのです。瞳は、目の中の鏡であって、鏡のモチーフとしても重要です）は、多発性硬化症により自分の未来が危ういことを知ります。折しも、カナダの学者が人間においてもクローニングが可能だと発表した記事を見つけ、この学者に自分を実験台とするよう頼みます。そして、この実験は成功し、彼女は世界初の人間のクローンを出産することになるのです。作品内では、これを「クローン暦元年」とします。これによって、彼女とその娘スーレイ（この名前はイーリスの綴りを逆にしただけのものです。つまり、IRIS = SIRI）は、母であって娘、一卵性双生児の姉であって妹、そして自分であって自分Bでもあるといった三重の複雑な関係となります。実は、イーリスは死後も自分という存在が残り、自分の芸術を更に発展させてくれるためにクローンを作ったのですが、そのための入念な教育にもかかわらず、やがてスーレイは離反していきます。しかし、自分を主張したいスーレイであったとしても、何をしてもイーリスに似るばかりです。ですから彼女は「わたし=あなた=わたしたち」という束縛から抜け出せないものすごく悩みます。また逆に一方で、もしスーレイが一卵性のクローンとしての存在に全面的に依存し、そこに安住すれば、それはそれなりにイーリスとの一体的な安心感がありますが、そうした一体感は当然偽のものであり、スーレイはそれを双子大会に出席したことで痛感します。そこで、彼女は心の中で叫びます。「わたしはコピー、あなたはオリジナル。あなたが私を作らせた。あなただけが権力を握ってた。あなたなしでは、わたしは存在しなかった」と。また他方で、皮肉なことに、イーリスにしても「生きた鏡」は耐え難いものになります。つまり、自分がどんどん衰えるのに、スーレイは若く、どんどん美しくなっていくからです。イーリスにとってスーレイ、つまり「イーリス2号は慰めどころかどんどん拷問になっていく。若い自分の姿に嫉妬するのだ」というわけです。結局、イーリスの死まで、このふたりは「わたし=あなた」の問題に苦しみ続けるのです。

イーリスの死後、スーリイはまず「双子は片割れの死を、クローンの子はクローンの母の死を、どうやって受けとめたらいい？これからどうなるの？わたしも病気になるの？みんな遺伝で決まってるの？わたしはただの21ではなく、50歳でもあって、イーリスと同年なの？」と自ら問いかけることから始まります。そして時間の経過と共に、「やっとひとりで生きてもいい、という喜びから」「泣くことができる」ようになり、そしてついに「死んだのはあなたであって、わたしではない」との境地にたどり着くことができるのです。これが言ってみれば「わたし暦ゼロ年」です。著者ケルナーは、物語の最後にスーリイがイーリスのような音楽家ではなく、美術家として一人立ちしていく10年後を添付しています。そして、そのときスーリイが名乗ったペンネームが「ダブルユー」というのですから、皮肉というか、しゃれているというか、問題をよく捉えているというか、思わずニヤリとしてしまいました。

著者自身が、「この作品は議論のための作品である」と書いているとおり、この作品には多くの問題が含まれています。双子は果たしてクローンなのか？双子をクローンと同一視する見方は、双子に対して否定的な考えを広めたりはしないのか？「自己」とは遺伝子とどう関係するのか？遺伝子が一緒だったら、「わたし」という存在も同じなのか？そして、そもそも人間のクローニングは許されるのか？また、一般的問題としても厳しく親子の関係を問うています。

個人的なことですが、訳者は僕の大学の先輩で、この『ブループリント』の訳業は彼女の翻訳の中でも一、二を争う素晴らしいもので、読みやすく、それでいてじっくりと考えさせるような日本語になっています。しかも、青少年向けに出された本なので、ティーンズが手軽に手にできる感じです。

「クローン」と聞けば、ちょっと敬遠したい気持ちになるテーマですが、双子・多胎児が抱えている問題がまた違った角度で照らされていて、大変参考になります。ぜひ、お読み下さい。



シャルロット・ケルナー：『ブループリント』書影

シャルロット・ケルナー：『ブループリント』（鈴木仁子訳）講談社。

グロテスクな医療ミステリ、遺伝子ホラー作品としては、

アイラ・レヴィン：『ブラジルから来た少年』（小倉多加志訳）早川書房；ハヤカワ文庫。

吉村達也：『ふたご』角川ホラー文庫。

やはり医療ミステリですが、同時にアイデンティティの問題を真面目に、あるいは文学的にも比較的高いレベルで扱ったものには以下のものがあります。

東野圭吾：『分身』集英社。

ケン・フォレット：『第三双生児』（佐々田雅子訳）新潮文庫。

『ツインズ』37号（ビネバル出版）から転載・修正